

## 小学校教師がイメージする男子・女子児童の「いじめ」

三 島 浩 路<sup>1)</sup>

### 問 題

学校内で起きる「いじめ」に対処する様々な方法が提案されている (e.g. イギリス教育省, 1994: 河西, 2001: 北村, 2002)。そうした提案があるにも関わらず、「いじめ」が解消したとは言い難い。

「いじめ」が解消しない原因の一つに、「いじめ」という現象の多様性がある。森田 (1999) が、「実際のいじめの場面では、いじめの手口や人間関係のしがらみの絡まり方やこだわり方、あるいは被害者と加害者との関係の親密さについては男女間で著しい相違が見られる」と指摘しているように、「いじめ」に関しては、男女間で違いがみられる。そのため、こうした多様な形態の「いじめ」を包括的に解消する方法を開発することは容易ではない。また、児童・生徒の年齢によっても、児童・生徒相互の人間関係や「いじめ」の手口は異なることが予想できる。こうしたことから、性別や年齢で「いじめ」を分類し、それぞれに応じた対処方法を考えることが、「いじめ」を予防・解消する上で最初に取り組むべき課題ではないだろうか。

それでは、男子の「いじめ」と女子の「いじめ」にはどんな違いがあるのだろうか。菅野 (1996) は、「いじめの背景」として、子どもたちの言葉や振る舞いの“すさみ”をあげ、女子の“すさみ”に対する指導に、教師が難しさを感じることが多いことや、「小さなグループを形成し、密接で閉鎖的な関係を築く」ことが、女子の「いじめ」の背景にあることを示唆している。高石 (1988) は、女子の「いじめ」は集団的であり、かつ、間接的な方法で攻撃が表出されやすいと述べている。さらに、男子に比べて女子の方が、より親密な友人関係をつくることや、より小さな集団の友人関係をつくることや、女子のこうした「いじめ」の特徴と関連していることを高石 (1988) は指摘している。こうしたことから、

「いじめ」の形態が、男女間で異なることが予想できる。

ところで、「いじめ問題に関して、教師が重要なキーパーソンであることは否定できない」と秦 (1999) が述べているように、「いじめ」に対する教師の考え方や対処行動などが、「いじめ」の解消や発見、場合によっては「いじめ」の拡大や誘発にまで影響を与えることが考えられる。鈴木 (1989) は、教育学部の2年生、教育実習生及び現職教師それぞれ約100名ずつを対象に「いじめ」を根絶することは可能かどうかを調査し、この調査結果により被調査者を3群に分類し、「いじめは理由がしっかりしている時には、(いじめることを)許される」などといった設問に対する回答を比較している。田浦 (1996) は小学校教師約300名を対象に、子ども観(「子どもの実態が今も昔も変わっていない」など)やいじめ観(「いじめは絶対にあってはいけない」など)についての質問紙による調査を実施した。調査の結果、経験年数11年目以上の教師全員が、「いじめ」の指導をしたことがあることから、小学校においては、一般に考えられているよりもはるかに高い割合で「いじめ」が発生しており、小学校においては「いじめ」が日常的に存在していることや、調査対象の9割近くの教師が、いじめの指導は難しいと感じていることを報告している。高木 (1986) は、「学級集団のなかで起こる『いじめ』は、その学級を指導する教師によっても大いに影響される」と述べ、中学生約400名を対象に、「いじめ」に対する認知、教師のリーダーシップ、学級集団の特性などを調査し、教師のリーダーシップと「いじめ」との関連を分析した。その結果、教師のP行動(目標達成行動)やM行動(集団維持行動)と生徒間の「いじめ」とが関連することを示唆する結果が得られ、リーダーシップのP行動よりもM行動の方が「いじめ」の生起とより深く関わっている可能性があることを指摘した。さらに、嘉嶋・田嶋 (1998) は、大学生約250名を対象に、小・中・高校の頃に体験した「いじめ」の様態と教師の対応及びその結果を質問紙法により調査した。その結果、いじめられた体験のある者の2割弱にあたる22ケースで、教師に

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程(後期課程)

「いじめ」の相談をしており、そのうち半分の11ケースについては、「いじめられなくなった」もしくは、いじめが「軽くなった」ことを報告している。この研究を総括し、嘉嶋・田嶋（1998）は、「いじめ」に関する教師への相談が非常に少ないこと、児童・生徒から相談を受けたことがらに教師が耳を傾け、具体的に対処することによって大半の「いじめ」が解消したか軽減したことを指摘している。「あなたは、いじめられて、だれかに相談しましたか」という吹田市立教育研究所（1985）が行った調査でも、いじめられた経験をもつ児童の約40%が「だれにも相談しなかった」と答え、「先生に相談した」と答えた児童は約10%にすぎなかった。こうしたことから、「いじめ」の問題を教師に相談する児童・生徒が少ないことが分かる。渡部・奥田・太田（2001）が、「いじめ問題への対応には、日々の子どもの関わり合いの中で培われた信頼関係こそが大切だ」という姿勢が、教師には求められる」と述べているように、いじめられている児童・生徒が、「いじめ」の問題を教師に相談するかどうかには、教師と児童・生徒間の信頼関係が関わっている。さらに、教師が普段から、「いじめ」という問題に対して、どのような考えをもち、そうした考えを児童・生徒に対してどのように伝えているのかということや、これまで学級内で起きた「いじめ」に対して、どのような対処行動をとったのかということも関連しているのではないだろうか。

教師が「いじめ」をどのようにとらえ、教師の考え方や対処行動などが「いじめ」の問題に影響を与える可能性について論じてきた。しかし、こうした研究の多くが、質問紙調査によってなされており、研究者が事前に想定した枠内でしか「いじめ」の問題に対する教師のとらえ方を分析できないという限界がある。

本研究では、研究者が事前に枠組みを想定せず、面接法により収集した逐語記録を中心に、一人ひとりの教師がもつ「いじめ」についての見方や考え方をとらえる。さらに、問題を小学生にみられる「いじめ」に絞り、小学生の「いじめ」に男女間でどのような違いがみられるのかを考察し、児童期の「いじめ」を予防・解消する手だてを考える基礎的な資料を探索的に収集することを目的としている。

ところで、「いじめ」について教師に尋ねることは、教師自身の教育活動についての否定的な側面をさらけ出させる行為と受け取られる可能性もあり、そのため教師が防衛的な態度をとり、「いじめ」についての十分な情報が得られないことも考えられる。そこで、調査協力者となる教師に対して、研究の目的などを丁寧に伝えるなどして、面接等を行うことに対する理解を慎重に得ると

同時に、「被験者の内面深くを分析する威力を持つ」（内藤、1997）、PAC（Personal Attitude Construct）分析の方法を用いた面接を行うことにした。

## 方 法

**対象：**愛知県内の小学校に勤務する教師5名（女性4名 男性1名）を調査協力者とした。なお、どの教師も、小学校での経験年数は10年以上である。

**調査時期：**2003年6～7月

**調査方法：**内藤（1997）を参考にして、以下のような手順で調査を実施した。①当該テーマに関する自由連想、②連想項目間の類似度評定、③類似度距離行列によるクラスター分析（Ward method）、④調査協力者によるクラスター構造の解釈やイメージの報告、⑤著者による総合的な考察。なお、調査協力者一人ひとりに対して行ったPAC分析（分析手順①～④）の結果から、男女にみられる「いじめ」の違いを中心にした総合的な考察（分析手順⑤）を著者が行った。

具体的には、著者が個別に面接して、分析手順①②③の作業を行った。分析手順①②に要した時間は、それぞれ10～20分程度であった。また、分析手順④に要した時間は、10～25分程度であった。連想刺激は、「男の子の『いじめ』、女の子の『いじめ』ということから、どんなことが思い付きますか。思い付いた言葉でも、単語でも、短い文でも結構です。思い付いた順にカードに一つずつ書いてください」というものをもちいた。なお、分析手順④の中で、調査協力者がクラスター構造の解釈やイメージの報告を行った後、一つ一つの連想項目について、それが女子に関わりが深いと思われる項目には「F」を、それが男子に関わりが深いと思われる項目には「M」を、女子・男子の両方に関わりがあると思われる項目には「MF」をそれぞれデンドログラムに記入するように調査協力者に依頼した。5名の調査協力者の半数以上（3名以上）が、女子または男子に関わりが深いと思われる項目としてあげた言葉を中心にして、男女間にみられる「いじめ」の違いについても考察する。

## 結 果

### PAC 分析

5名の教師の逐語記録の概要とデンドログラムを以下に示す。なお、逐語記録の中のアルファベットは、デンドログラムのクラスターのまとまりごとに調査協力者が命名した言葉に対応する。

■女性教師 1 (Fig.1)

A【相手を思いやる気持ちを持つとう：くつかくし～自分がされたらどう思う？】

相手の気持ちを考えないから、隠したり壊したり、こそこそ内緒話をしたり、おもしろ半分だったりするといった行動に出る。落ち着いて相手の気持ちを考えれば、自分がされたらどう思うかということを考えれば、こうしたことはできないと思う。そういうことも考えられず、さらに、自分の気持ちがうまく表現できなくて、靴を隠したり、内緒話をしたりする。今まで、学級担任をしてきて、こういうことはあった。

B【いやなことは「いやだ!」とはっきり相手に伝えよう：親の協力～人に言えない】

いじめられる子にも原因があると言われる。そういう子のイメージ。はっきり「いやだ」と相手に言えないイメージ。一般的におとなしい感じの子というイメージがある。そういった子の場合には、やはり、(デンドログラムの)一番上に出てきている「親の協力」が大切。以前に勤務していた学校で「いじめ」があったとき、おとなしい感じの子が、何人かの子にいじめられていた。それを親御さんが気づき、学校に連絡してくれた。そのとき、いじめられている子の親だけでなく、いじめている側の親の協力があって、「いじめ」が解決したということがあった。いじめる側といじめられる側の両方の親御

さんの協力。親御さん同士も十分に分かり合って、一緒に指導しようと、協力してくれた結果、「いじめ」がなくなったということがあった。

そのときの「いじめ」は、陰で暴力を振るうとか、脅すような言葉を掛けるとかいうものだった。いじめられている子は、自分がいじめられているということを親にも言えなかった。そうした中で、「いじめ」が起きていることがなぜ分かったかということ、子どもの体に傷やアザみたいなのがあることを親が見つke、親が子どもを問いただした結果、ようやく、いじめられていることが分かった。

C【赤信号 みんなで渡ればこわくない!精神はダメ!：しかと～〇〇きんがつく】

自分の考えがはっきりなくて、「誰々がやっているから」「みんながやっているから」ということで、「いじめ」が起きる。こうしたことが、今まででも何回かあった。よく考えればいけないことだとか、人を傷つけることだということも、はっきり分かるのだけれども、「みんながやっているから」だとか、「だれだれちゃんが言ったから」とか言って、一緒になっていじめる。5年生の学級を担任しているとき、「のろいづけ」という「いじめ」が起きた。「〇〇菌が付く」と同じようなこと。呪いを人に付ける。そうした「いじめ」が行われていることが分かったので、「のろいづけ」をすることについてどう

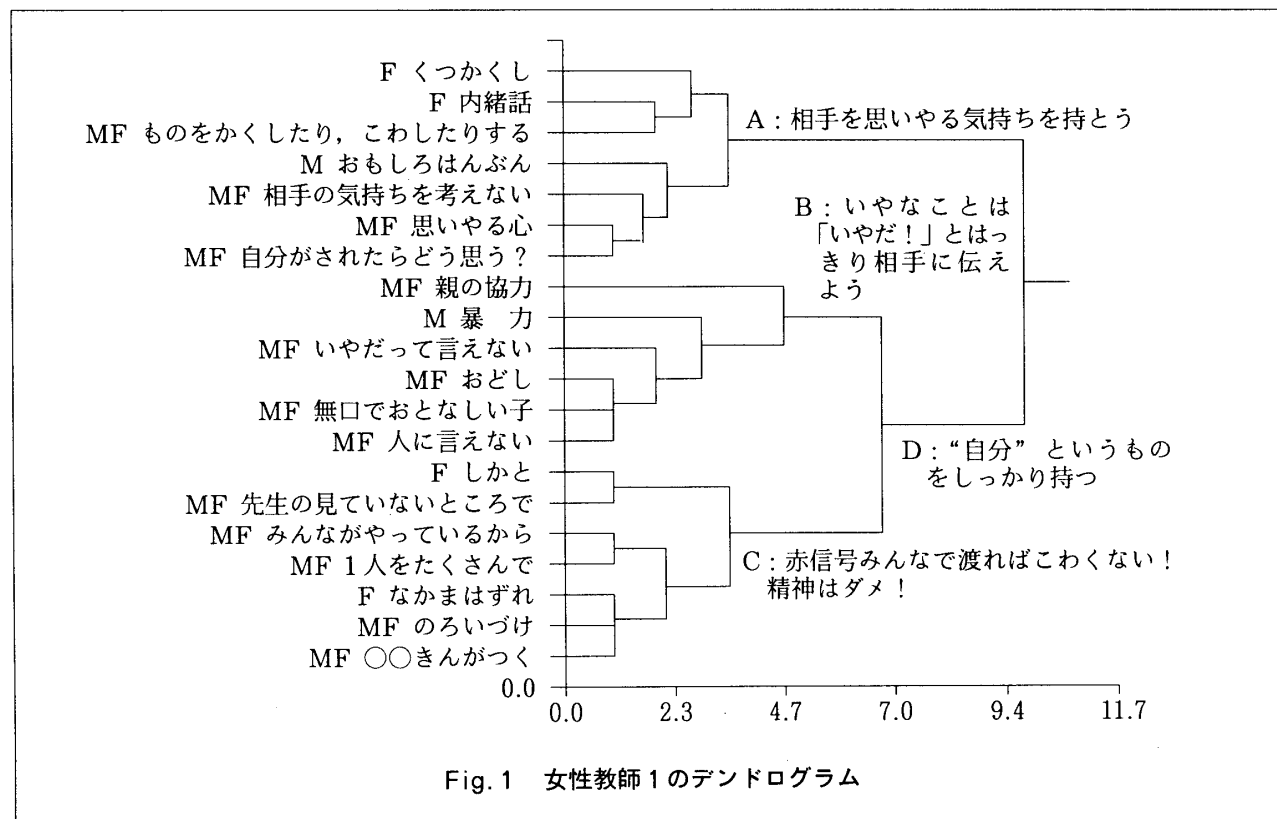


Fig. 1 女性教師 1 のデンドログラム

思うのかを、小さな紙に一人ずつ書かせた。呪い付けをした理由は、「みんながやっているから」とか、「自分だけやらないと、かえっていじめられる」とかということが書かれていた。「悪いことだとは分かっているのだけれども…」というようなことを書いていた子がたくさんいた。「やられている子が可哀想だと思う」という気持ちを表している子もいた。やられている子は可哀想だけれども、自分が仲間はずれにされちゃいけないから、「のろいづけ」をしたと書いていた子が何人かいた。

**D【“自分” というものをしっかり持つ：BとCの比較】**

Bはいじめられる側、Cはいじめる側のイメージ。2つのイメージの似ているところは、どちらもやっぱり“はっきり言えない”ということ。Cについては、悪いと分かっているけれども、みんながやっているからということでやってしまう。正義感はあるんだけど、それが言えない。Bについては、自分が「イヤだ」という気持ちを相手に伝えられない。そういうところが、BとCとは似ている。

**【AとDの比較】**

自分が正しいと思って、その気持ちを押し通そうというふうになると、相手の気持ちが考えられなくなることもある。AとDのイメージは、その辺りが違う。AとDのイメージの似ているところは、「正義」というか、「優しい気持ち」というか。具体的に分からないが、「思

いやる気持ち」かな。自分に対する思いやりの気持ちがあれば、こういうことはできない。自分に対しても相手に対しても、「思いやる気持ち」というのが、AとDのイメージが一致する部分だろうか。

**■女性教師 2 (Fig.2)**

**A【追いつめる：自殺～陰湿】**

イメージを尋ねられると答えるのが難しい。実際にこういうようなことがあった。ある子が、自殺をしようと、何回も考えたというようなことがあったので、このようなイメージが浮かび、私の中でこういうふうな（デンドログラムのように言葉が）結び付いたのだと思う。

**B【暴力：とじこめる～ける】**

これは男の子に多いタイプの「いじめ」だと思う。女の子で、こういうようなことをやるのは、あまり見たことがない。男の子では、割によくあることじゃないかと思う。担任の目が届かないところでやっているようなイメージもある。

**C【一人ぼっちにする：3人グループ～のろいづけ】**

これは、どちらかという女の子に多いタイプの「いじめ」だと思う。ただ、男の子の中にも、だれかを仲間はずれにする子がいる。積極的に攻撃する訳ではないが、いじめられている子に精神的なダメージを与える。

「のろいづけ」というのは、「バイ菌扱い」と一緒。

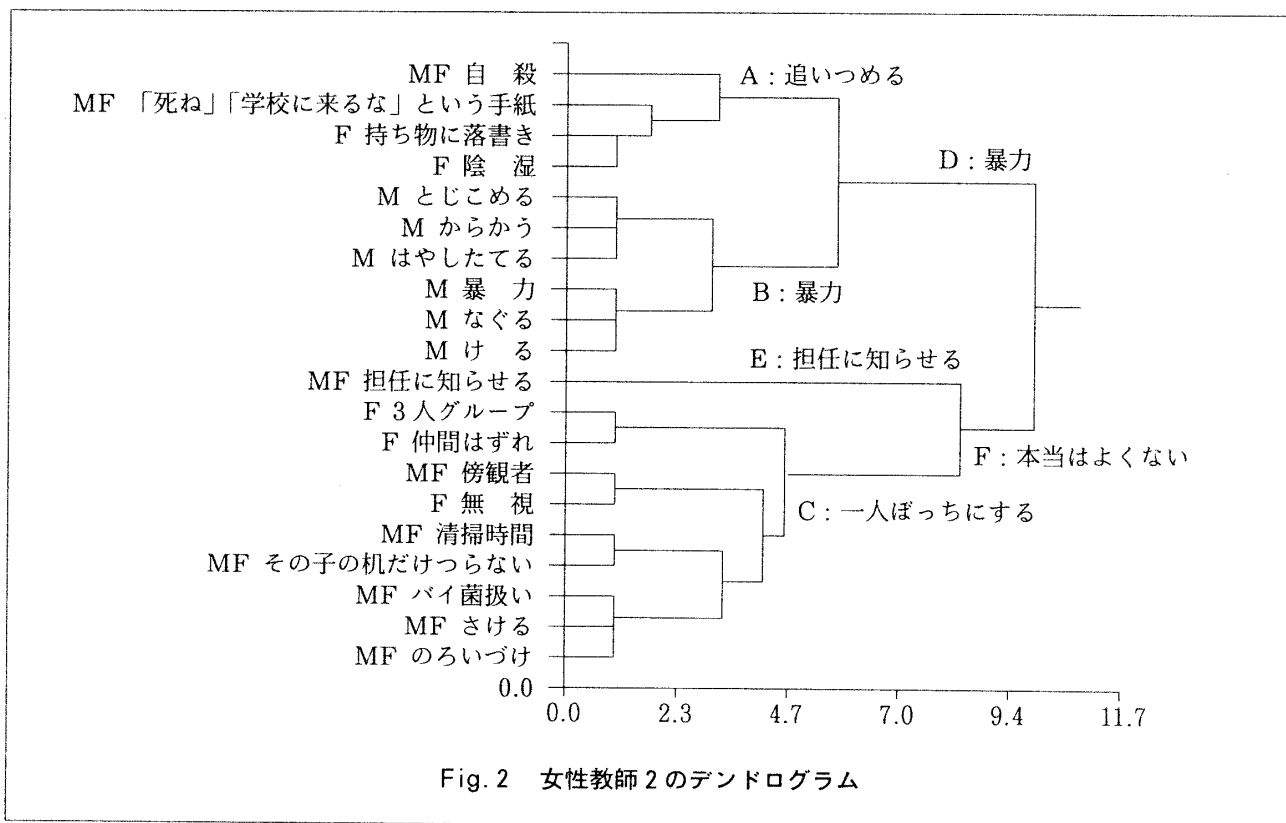


Fig. 2 女性教師 2 のデンドログラム

ある子が触ったものを、「その子の呪いが付いた」って言っては、ほかの子にひっ付ける。「のろいづけ」でいじめられている子が、自分の物に触ったときには、その子に付けられた呪いをほかの子に付ける。

#### D【暴力：AとBの比較】

大きく括れは「暴力」だが、「暴力」というと広くなり過ぎるような気がする。言葉の暴力としては、「はやしたてる」「からかう」ぐらいしか、この中には入っていない。「暴力」というよりも“調子に乗ってやる”という感じ。周りの雰囲気に乗ってやるという部分も、かなりあると思う。ただ、『死ね』『学校に来るな』という手紙（を書く）は、一人でやることもある。だから、その辺は、“調子に乗ってやる”というのとは違う。AとBは、相手を追いつめるという部分では、似ていると思う。

#### F【本当はよくない：E（担任に知らせる）とCの比較】

「3人グループ」とか「傍観者」とかいう部分と、Eとが結び付いていると思う。「3人グループ」も、担任との関係がうまくもてれば、グループ内で起きた問題を担任に知らせてくれる。けれども、「3人グループ」内の関係がうまくいかないと、グループの仲間の誰か一人を仲間はずれにしやすい。「傍観者」の中にも、表面上は傍観者で、いじめている子を注意したりはできないが、こっそり担任に知らせてくれる子がいるのではないかと、Eのイメージと結び付いたのではないだろうか。

無視するなどして「いじめ」を行っている子の中には、おもしろがってやっているのではなくて、本当はいけないと思いつつも、自分だけやらないと、自分がいじめられるのではないかと、思っている子もいる。

#### 【FとDの比較】

「暴力」というのは、自分から「いじめ」をするイメージ。一方、Fは、どちらかというところ、つられてやったり、傍観者であったりというイメージ。ただ、DだろうとFだろうと、いじめられる者にとってはどちらも同じ。

### ■女性教師3（Fig.3）

#### A【孤立：かげ口・なかまはずれ】

こそこそとした感じ。グループづくりをするときに、自然に一人ぼつんと残ってしまう感じ。そんなときに、かげ口が聞こえてくるような感じがする。グループづくりの場面だったり、遠足でお弁当を食べる時だったり、休み時間だったり、そういうときに、一人残ってしまうようなイメージで、「かげ口」という言葉と、「なかまはずれ」という言葉が自分の中では結び付いている。

#### B【あきらめ】

「あきらめ」というのは、「いじめられても仕方がない」とか、ある子がいじめられていることを知っているにも関わらず、何も関わり合おうとはしないというイメージ。

たとえば、去年まで多くの子から暴力行為を受けていた子が、今年になって、そうした暴力行為を受けなくなった。けれども、ちょっとしたからかいは続いている。そんなからかひを受けたとき、「これぐらいなら、去年よりはましだ」とその子は言う。こんなことでいいのだろうか。この子は、あきらめちゃっているのだろうかと思う。友達がいじめられているとか、友達が嫌がっているのが分かっているけど、友達をいじめている子や、友達が嫌がるようなことをしている子に、何も言えない子がいったりする。そういうのが、「あきらめ」というイメージ。

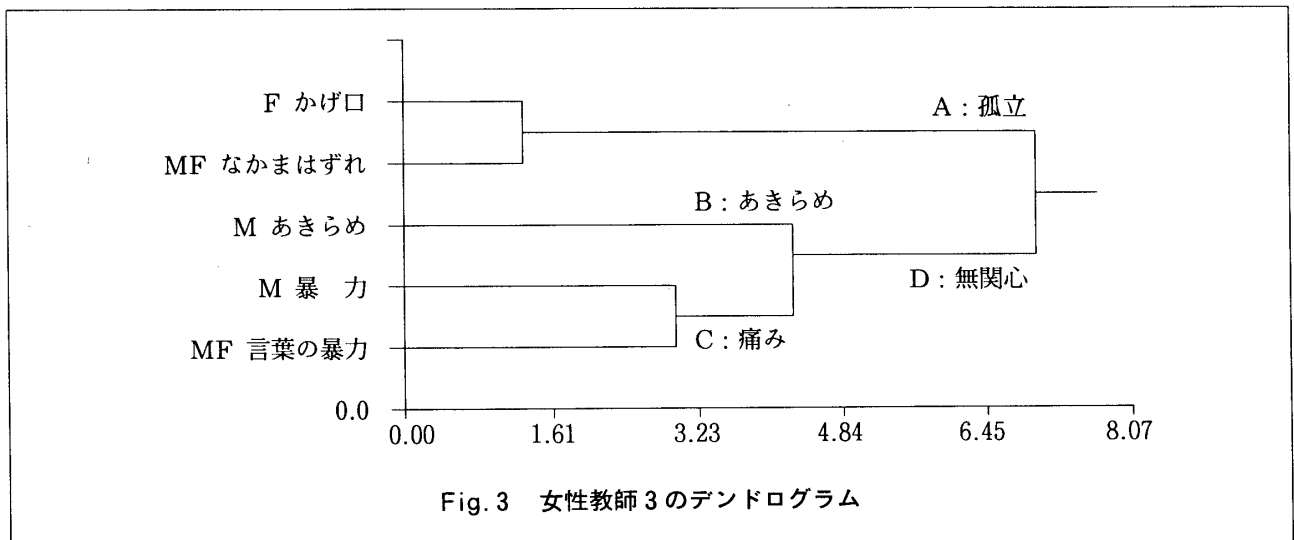


Fig. 3 女性教師3のデンドログラム

C【痛み：暴力・言葉の暴力】

殴ったり蹴ったりというのを「暴力」とイメージした。「言葉の暴力」というのは、その子が嫌がっていることを言うこと。どちらも、その子にとっては“痛い”というイメージがあるので結び付いた。

「暴力」ということについてだが。暴力を振るっているにも関わらず、自分では、暴力を振るっていると思っていない子がいる。そういう子は、「遊びだ」とか「ゲームだ」とかいう言葉を使い、「暴力」という言葉を使いたがらない。けれども、やられている子は嫌がっていて、やっている子の方が明らかに強い力でやっているの、これは暴力だと感じる。そういうのも「暴力」のイメージに入る。「言葉の暴力」は、「デブ」とか「臭い」とか、何気なく吐き捨てる言葉が、“痛い”とを感じる。

D【無関心：BとCの比較】

痛みがあるのに見過ごしたり、気づかないでいたりする。「あきらめ」と「痛み」は、全然違うものだと思うが、痛みを受けている子と、その子のあきらめの気持ちというイメージや、痛みを受けている子がいることを知っているのに、しらんぷりをしている子どもたちのイメージという部分では結び付く。

【AとDの比較】

孤立している子がいても、自分たちが楽しくやっていたら、そうした子の存在に気づいていても、あまり気

にしない。孤立している子のことを深くは考えない。そういう部分で関連がある。

■女性教師4 (Fig.4)

A【悪口による発散：落書き～からかう】

相手に対する悪意。学級ではよくあること。何気なくついやってしまいがちなこと。

B【出る杭は打つ：点数を気にする子～暴力的】

これは、前に受け持っていた子のイメージ。その子は、頭が良くて、自分よりも、何かにつけて良い子がいると、その子をターゲットにしてつぶしていく。その子が頭に浮かんだ。

C【自己防衛的いじめ：仲間はずれ～陰湿】

高学年の女子に特に多い「いじめ」のパターン。直接いじめるのではなく、みんなで示し合わせていじめるような感じ。直接的な行動には出ない。次の（クラスターの）固まりとは違って、直接的な行動に出ないの、で、「悪くないでしょ」というような感じで、いじめている子自身が、自分を守りつついじめているというイメージ。

D【直接行動によるいじめ：ノートを破る～机をつらない】

気にくわないから直接的に行動してしまうイメージ。

E【自己中心的行動：CとDの比較】

この二つの違いは、直接的に相手に危害を加えるのと、直接的にはやっていないという点。似ているところは、

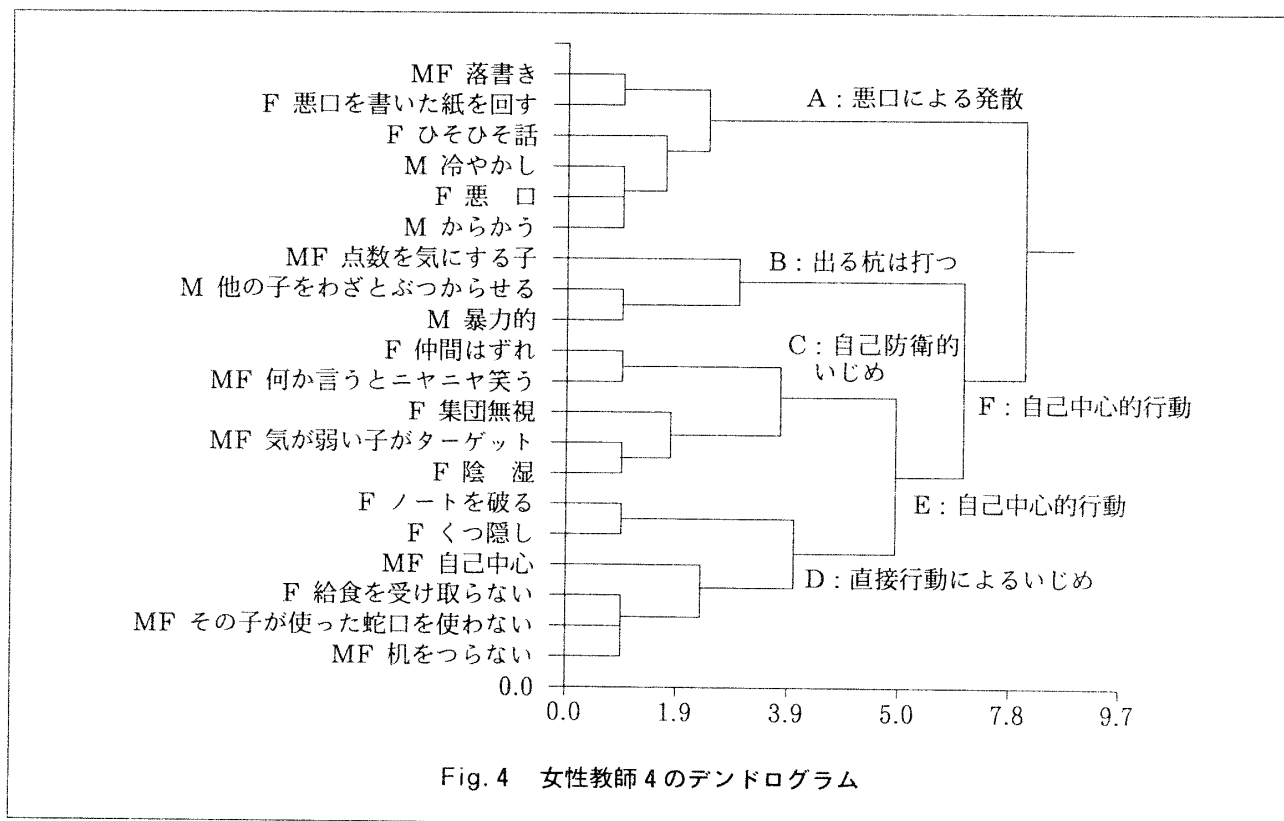


Fig. 4 女性教師4のデンドログラム

自分がかawaiiという意識が強いのかな。

**F【自己中心的行動：BとEの比較】**

一致しているところは、自分が一番だという自己中心的な考え方。

**【FとAの比較】**

どちらもやっぱり自己中心的なところから出ている。FとAの違いは、Fの方が行動で表現しているのに、Aの方は行動では表現していないところ。Aの方も、相手に関わってくることではあるのだけれども、相手に対してダイレクトにはではない。

**■男性教師 (Fig.5)**

**A【いじめは社会の問題：家庭内でもいじめはありうる～周りの大人、社会の問題でもある】**

家庭内と言ったら、嫁姑の確執など。職場でもかつて、いじめがあった。そういうのが、具体的なイメージ。「周りの大人、社会の問題でもある」というのは、社会自身に弱い者をやっつけるような風潮があるというイメージ。

**B【小さな芽を見のがさない：無視する～〇〇菌とってからかう】**

「いじめ」は、いきなりはじまるのではない。最近とくにそうだが、じゃれあっているような感じで、そこか

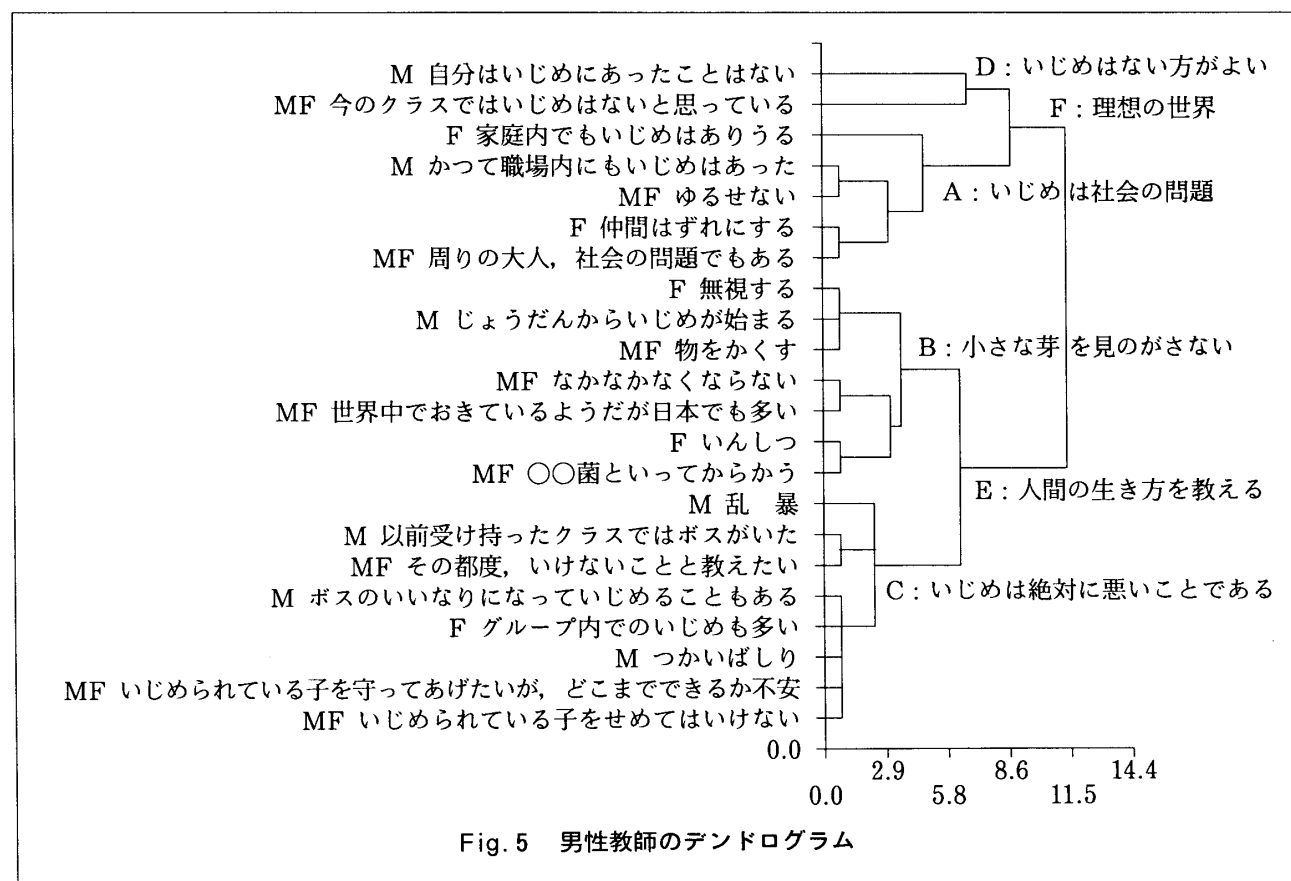
ら「いじめ」が始まる。クラスに「いじめ」は無いと思っているのだが、細かくみれば「いじめ」につながるような、「冗談だ」と言って人をつねるような行為がみられる。クラスに「いじめ」は無いと言いつつも、細かく見ればそういう芽がある。暴力を振るうということはないが、最近の「いじめ」は、ちょっと陰湿な感じがする。

授業参観の折、廊下に出しておいた学級名簿のある児童の名前のところに、「死ね」と書いてあった。誰が書いたのかは分からないが、そういうことがあり陰湿な感じがする。「いじめ」は、なかなかなくなるというイメージがある。

「〇〇菌」というのも、言っている子どもは冗談のつもりで言っているようで深い意味は分かっていない。「〇〇菌が触った」という言葉を聞くことがある。深い意味があって、そういう言葉を使っている訳ではないが、これも「いじめ」の芽だと思う。

イギリスにも「いじめ」はあるという話を聞いた。猿の世界にも「いじめ」はあるらしい。集団で生活しているところではどこでも、「いじめ」はあるのだろうか。猿も集団で生活しているし。だから、「いじめ」はあるもの考え、その上で、「いじめ」にどう対処していったらいいのかを考えていった方がいいという気がする。

**C【いじめは絶対に悪いことである：乱暴～いじめられ**



ている子をせめてはいけない】

かつてクラスにKというボスがいた。クラスのみならずKの言いなり。担任として、苦労した。その子がクラスの男子をみんな従えているというか、反対に、みんながその子に気を遣い、その結果、言いなりになっている感じがあった。そのとき、クラスには「つかいばしり」をするような子はいなかった。テレビでニュースを見ると、「つかいばしり」する子の話が出てきて、その子が「いじめ」の対象になっていく。「いじめ」がエスカレートすると、すごく乱暴になって、最近では、殺人事件にまで発展するぐらいだ。だから、早いうちに、「これをやったら、それが『いじめ』になるんだよ」と教えて行かなくてはならない。「いじめ」にあたるようなことを子どもたちがしているところを見つけたら、その都度、「それが、『いじめ』なんだ」と教える。子どもたちの中では、「いじめ」と分からずにやっているところもあるもんだから、何が「いじめ」にあたるのかを、その都度、教えることが必要。

D【いじめはない方がよい：自分はいじめにあったことはない～今のクラスではいじめはないと思っている】

なんだか、“のんびりできる”って感じ。ほっとするような感じ。

E【人間の生き方を教える：BとCの比較】

細かいことを一つ一つ見逃せば、それが「いじめ」につながる。だから、小さいうちから、「いけないよ」と教えていかなくてはならない。何が「いじめ」にあたるのかを教えることが大事だと思う。先に生まれた者が人間の生き方を教えるって感じかな。

F【理想の世界：AとDの比較】

社会の問題。「いじめ」の無い社会がいいなと思う。理想社会かな。無理だろうけど。

【FとEの比較】

「いじめ」は現実存在する。そうした中で「人間の生き方を教える」。やはり、教育。自然のままで放置しておいてはいけない。物事の善悪を教えずにはいけない。そうした場面で、教師の役割はすごく大きい。題目を唱えるような「道徳」ではなく、本来の道徳教育というのは大切。文部科学省がやっているような道徳教育ではなく、人間の生き方としての道徳。それを教えることは大事な。

連想項目の出現頻度の比較

5名の調査協力者の半数以上（3名以上）が、女子または男子に関わりが深いと思われる項目としてあげた言葉は、「陰湿」「仲間はずれ（にする）」「（集団）無視（する）・（しかと）」及び「暴力（的）」の4つである

Table 連想項目の男女別出現頻度<sup>2)</sup>

連 想 項 目	男子に 該 当	女子に 該 当
陰 湿	0	3
仲間はずれ（にする）	0	4
（集団）無視（する）・しかと	0	4
暴 力	4	0

(Table)。こうした言葉に加え、女子に関しては「ひそひそ話（内緒話）」「くつ隠し」、男子に関しては「からかう」という言葉を、それぞれ2名の調査協力者があげていた。

総合的な考察

PAC分析の結果、「いじめ」を行う理由として、「みんながやっているから」「周りの雰囲気に乗って」「つられて」などがあげられた。また、いじめられている子は可哀想だけれども、自分が仲間はずれにされないために、「いじめ」に荷担している児童の姿や、「いじめ」は悪いことだと分かっているけど嫌だと言えないという児童の姿が浮かび上がった。さらに、保護者との協力が「いじめ」を解消する上で有効であることが示唆された。しかし、「いまのところ家庭との連携に積極的な教師はあまり多くない」と秦（1999）が述べていることから分かるように、教師と保護者が協力して「いじめ」を解消した事例が多いとはいえない。

ところで、PAC分析の結果から、「いじめ」を、形態によって二つに分類できることが示唆された。一つは、靴を隠す、内緒話をする、かげ口を言う、無視するなど、直接的な行動に出ない形態の「いじめ」である。もう一つは、「じゃれあう」「からかう」など、「遊び」に関連した形態の「いじめ」である。後者の形態の「いじめ」を行う子どもは、「遊び」や「ゲーム」という言葉を使って自分たちの行動を説明し、「暴力」という言葉を使いたがらないという特徴があることも示唆された。

次に、男子の「いじめ」または、女子の「いじめ」に関わりが深いと思われる項目としてあげられた言葉（Fig. 1～5とTableを参照）と、PAC分析の結果をもとに抽出した「いじめ」の二つの形態との関係を重ね合わせ、男子の「いじめ」、女子の「いじめ」の特徴を教師がどのようにとらえているのかを考察する。

2) このTableにみられる男女別の出現度数について、Fisherの直接確率検定を拡張した手法で検定（SPSS, 1996）を行った結果、出現度数の違いは有意な水準（ $p < .01$ ）のものであった



### ■教師からみた男子児童の「いじめ」の特徴

殴る・蹴るといった暴力的な「いじめ」。「からかう」「冷やかす」「冗談からいじめが始まる」「おもしろはんぶん」という言葉から、いじめる側の児童にとっては、「遊び」という要素が強く、自分の行為を「いじめ」ととらえていない可能性もある。そうした児童に対しては、「いじめ」と関連がありそうな行為を見つけるたびに、「それが『いじめ』なのだ」という指導を積み重ねていくことが、「いじめ」の予防や解消につながる可能性もある。

### ■教師からみた女子児童の「いじめ」の特徴

ひそひそ話をする・くつを隠す・かげ口を言う・悪口を書いた紙を回すといった行為は、「いじめ」に関わっている当事者以外には分かりにくく、こうした陰湿な行為を特徴としている。また、「3人グループ」「グループ内でのいじめも多い」ということも女子の「いじめ」の特徴としてあがっていることから、無視する・仲間はずれにするという行為は、少人数の仲よし集団内で行われている可能性が高い。「女の子の攻撃は間接的なかたちをとり、表面に出ない。陰口をきき、のけものにし、噂を流し、中傷する。あらゆる策を弄して、ターゲットに心理的な苦痛を与えるのだ。男の子の場合、いじめの対象は、それほど親しくない知りあいか外部の人間であることが多いが、女の子のいじめは、結束のかたい仲よしグループの内部で起こりやすい。そのため、いじめが起こっていると外にはわかりにくく、犠牲者の傷もいっそう深まる」とシモンズ(2002)が述べているように、こうした形態の「いじめ」は、女子に多くみられる「いじめ」の形態といえよう。

しかし、こうした形態の「いじめ」を予防・解消する上で参考となるようなものを、今回の調査では得ることができなかった。

## 引用文献

- 秦 政春 1999 いじめ問題と教師 ―いじめ問題に関する調査研究(Ⅱ)― 大阪大学人間科学部紀要, 25, 237-257.
- 菅野 純 1996 いじめ 子どもの心に近づく 丸善ブックス
- 嘉嶋領子・田嶋誠一 1998 児童・生徒期の対人関係ト

- ラブルに関する基礎的研究 ―‘いじめ’問題への教師の対応とその効果について― 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 43(2), 201-210.
- 河西泰道 2001 子どもと子どもの関係の中で起きる事件・事故への対応 高階玲治(編著) 見てわかる学校の危機管理マニュアル(pp.64-79). 東洋館出版社
- 北村文夫 2002 「いじめ問題」をなくす決め手は何か 宮川八岐(編) 新しい生徒指導への経営戦略(pp.106-109). 教育開発研究所
- 森田洋司 1999 いじめの現実 森田洋司・滝 充・秦政春・星野周弘・若井彌一(編著) 日本のいじめ ―予防・対応に生かすデータ集― (pp.17-23). 金子書房
- 内藤哲雄 1997 PAC分析実施法入門 ナカニシヤ出版
- レイチェル・シモンズ 2003 女の子どうして、ややこしい! 鈴木淑美(訳) 草思社(Simmons, R. 2002 *Odd girl out: The hidden culture of aggression in girls*. New York: Harcourt Inc.)
- 佐々木保行(監訳) 1996 いじめ ―一人で悩まないで― 教育開発研究所(Department for Education, U.K. 1994 *Bullying: Don't suffer in silence.*)
- SPSS 1996 *SPSS Exact Tests 7.0 for Windows* Chicago: SPSS Inc.
- 吹田市立教育研究所 1985 「いじめ」問題 研究紀要, 55.
- 鈴木康平 1989 いじめに対する教育学部2年次生・教育実習生・現職教師の認識 熊本大学教育学部紀要, 38, 257-270.
- 高木 修 1986 いじめを規定する学級集団の特徴 関西大学社会学部紀要, 18(1), 1-29.
- 高石浩一 1988 少年期の対人関係の問題について ―特に「いじめ」との関連から― 京都大学教育学部紀要, 34, 221-230.
- 田浦桂三 1996 「いじめ」に関する小学校教師の意識とその変化 鳴門教育大学研究紀要, 11, 93-105.
- 渡部雅之・奥田陽子・太田祥子 2001 いじめへの介入における傍観者と教師の意識と役割 滋賀大学教育学部紀要(人文科学・社会科学), 51, 19-34.
- (2003年9月30日 受稿)

ABSTRACT

Bullying of a Boy and a Girl Which an Elementary School Teacher Imagines

Kouji MISHIMA

This study examined the perception of student bullying as seen from the perspective of elementary school teachers. A PAC analysis was conducted on responses from five elementary school teachers regarding their image of “bullying by boys” and “bullying by girls”. Teachers were asked to write down each individual image on separate cards, and these images were rated on seven-point scales for their similarity to each other. This rating was treated as the similarity distance for a cluster analysis, and dendrograms were produced. Teachers were given feedback on the dendrograms, and they were asked about their interpretation of these, as well as about the images of bullying. PAC analysis was subsequently conducted, and it was discovered that teachers feel that there are problematic behaviors behind bullying, and that teachers need to work together with the parents or guardians in order to minimize bullying. Furthermore, bullying by boys were characterized by violence and teasing, while with girls, bullying tended to be more subtle, alienating, and ignoring.

Key words: PAC analysis, elementary school, teacher